

『コリオレーナス』に見られる主人公の現実からの乖離

はじめに

政治とは人々がより良い状態で暮らせるようにしようとする活動一般を指す。政治家とは民衆の代表であり、それゆえ国の政治は一国の国民の能力以上にはなる事ができない。人々が教育の中で教わってきているが忘れがちな重要な事である。ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『コリオレーナス』(*Coriolanus*, 1607)¹は軍人であるマーシャス(Martius)、後にコリオレーナス(Coriolanus)と呼ばれる事になる男の信条と民衆との軋轢による悲劇を描いた作品である。

主人公コリオレーナスの悲劇の本質が彼自身の欠陥にあるという先行研究が数多くある。例えばフィリス・ラッキン(Phyllis Rackin)は、「軍人としてコリオレーナスは力以外の権威を知らない。しかし力だけでは共和国を統治するのには十分ではない。なぜなら権威こそ敵が他者に対して行使するものであり、コリオレーナスは自国民を自分の敵にすることで当然の最後を迎えるのだ」(69)と述べている。そしてこの自国民を敵にする様子に近い批評としては、シャノン・ミラー(Shannon Miller)であり、「コリオレーナスの嫌悪感の強さはとても大きく、国民を恐ろしい伝染病とみなしている」(292)としている。国民への敵対心が明らかであろう。

軍人と政治。必ずしも矛盾する性質ではないと思われるがコリオレーナスという主人公にはこの二つの性質が互いにぶつかってしまってよい方向へ国民を導くことができない。この事がどうやらコリオレーナスの悲劇を説明する要素となっているようである。しかし、国民を軽蔑し、避けるコリオレーナスであるがリチャード・ラスパ(Richard Raspa)が「平民への軽蔑にもかかわらず、コリオレーナスは実際に平民たちの援助を自身の執政の立場のために受けている」(218)と説明しているように、完全には国民から分断はしていない。いわば自身の国民への考えが矛盾を示している。

避けながらも力を借りているという矛盾が作品解釈のキーワードと考えられる。後にオーフィディウス(Aufidius)にコリオレーナスが寝返り、自身の母国ローマの敵になるわけだが、オーフィディウスの部下の以下の言葉は作品の本質をついているようで興味深い。

召使 1 戦争があつてほしいね、俺も。昼が夜よりも良いものであるように、戦争の方が平和よりもいいね。戦争は陽気で目が覚めて、耳が良くなり、生き生きする。でも平和はまるで中風病の弱弱しさ。陰気で目がぼやけて耳も遠くなり死んだみたいだ。戦争による殺人よりも平和の時の私生児の数の方が多いだろう。

召使 2 まさにそれ。戦争は強姦犯人だが、平和は寝取られ亭主を作る事は否定できない。

召使 1 そう。だから平和のときは互いに憎みあうようになるんだ。(4. 5. 226-35)

戦争はもちろん不幸であるが、平和の方が不幸であるとする召使たちの言葉は、逆説の

真理である。しかし、召使の言葉と一般的な考えの両方を考慮に入れるならば、戦争も平和もどちらも不幸となり、どちらにも幸福は見いだせない両面のマイナスである。コリオレーナスの民衆への敵対心と依存という両面的態度と似ているのではないか。しかも軍人としてのコリオレーナスと戦争を関連付けるのに召使たちの戦争の話は相性が良い。この召使たちの両面のマイナスとコリオレーナスのどっちつかずの態度という矛盾に焦点をあてて、コリオレーナスの悲劇の本質は何か、というのを本稿の論題としたい。コリオレーナスはなぜ、悲劇的な死を迎えなければならなかったのだろうか。

1. 作品にみられる実際の側面

作品のタイトル『コリオレーナス』とは同名主人公の名誉の称号がそのままタイトルになっているのであり、主人公コリオレーナスは元々マーシャスという名であった。主人公を説明するのに、名誉という性質は省くことのできない重要な考え方である。コリオレーナスが母親ヴォラムニア(Volumnia)の言葉に影響されやすい事は後に明らかになるが、母親の「名誉こそあの子には相応しいと考えている」(1.3.9-10)という言葉や仮に息子が戦死した時でさえも「それならあの子の名声こそ私の息子になったでしょう」(1.3.20-1)というような言葉も、コリオレーナスの名誉という属性を説明するのに十分である²。そしてコリオレーナス自身も戦争中には「誰かいないのか。命よりも不名誉を恐れるものは。誰かいないのか卑劣な命よりも勇敢な死を重視する者は」(1.8.70-2)と兵士を鼓舞し、やはり名誉を重視している³。

この作品は主人公と民衆の関連性が重要な要素だが、では民衆はコリオレーナスの名誉という属性に対して、どのような態度を示しているのだろうか。作品の冒頭を引用してみる。

市民1 あいつを殺し、穀物をこっちの言い値で手に入れる。

こういう決まりだったな。

一同 もう、議論はいい。実行だ。さあ、行くぞ、行くぞ。

市民2 俺にも一言言わせてくれ、寛大な諸君。

市民1 俺たちは貧困なる市民だ。

寛大であるべきは貴族たちのはずだ。お偉い方が食い過ぎている分だけでも、俺たちは助かる。せめて、その食い残しを腐らないうちに

俺たちに回してくれれば、俺たちだって助けてけてくれて

情け深い人たちだと思ふんだ。ところが、連中は俺たちはもっと大切なんだと考え、俺たちが骨と皮だけになって苦しむ惨めな姿を

見ると連中はそれに照らし合わせて自分の脂ぎった豊かさに

ますます満足している……神々だっご存じだ。

俺たちが復讐しろというものも

血に飢えているからではない。パンに飢えているからだ。(1.1.10-23)

市民たちの望みは名誉や名声というタイトルではなく、空腹を満たしたいという現実感

に基づいている。食べる事という生命にかかわる事なのである。コリオレーナスがいう戦争における名誉と生命の関係とは全く違う生活という卑近な現実が市民にとっては重要である。確かに元のマーシャスという名にコリオレーナスという称号を与えて、名誉を主人公に付与したのは市民かもしれないが、それは戦争の被害から自分たちを救ってくれたというやはり現実の利益に基づく感謝からである。市民たちの現実感とコリオレーナスの名誉には大きな差がある。後にコリオレーナスを追放して、コリオレーナスが敵になり自分たちを攻めてくることを知った市民たちが、やっぱりコリオレーナスを追放すべきではなかったなどと態度を急変させるが、そこにも被害は受けたくないという現実重視の姿勢が見られる。作品の重要な要素である市民と主人公の関係性は現実感と名誉において隔たりが存在する。この現実重視の市民の態度はダーシー・ウデル(Darcy Wudel)の「平民たちは戦争に関連する名誉を求める事には熱心ではない」(219)という説明でも明らかではないだろうか。作品の解釈で現実感と名誉の乖離は重要である。

コリオレーナスの名誉重視とは反対に現実重視の登場人物は、市民たちに加えてもうひとり存在する。それはヴォルサイの将軍オーフィディアスである。オーフィディアスはコリオレーナスの敵であるが、彼は名誉よりも実際を重視する人物である。コリオレーナスと5度戦い、そしてその度に敗れたオーフィディアスは「俺の闘争心はかつての誇りを失ったのだ。かつては一騎打ちの剣と剣で勝負をつけたかったが、今は卑怯な手であっても怒りに任せてもだまし討ちであってもやっつけたい」(1. 11. 12-6)と述べ、敵であるコリオレーナスを倒すには堂々の勝負という名誉よりも、現実的な勝利のためには手段を選ばないという考えである。現実重視の姿勢がわかる。

そしてオーフィディアスには真実を見抜く力が備わっている。コリオレーナスを説明する「融通の利かない性分なので、兜から座布団の切り替えも出来ないで、平和になっても同じような厳しさを戦争を指揮するようにふるまうのだ」(4. 7. 42-5)、それゆえ恐れられ憎まれて追放された、と真実を見抜いている。この説明はコリオレーナスを表すのにふさわしい。真実を見抜く力とオーフィディアスの現実感は共に似たようなカテゴリーに入る特徴である。

ローマに復讐しようと考えたコリオレーナスはオーフィディアスに寝返るが、結果的にコリオレーナスはローマを攻める事はしない。以下にあげるオーフィディアスの怒りの言葉は彼の現実重視を説明する最も明らかな例である。

オーフィディアス 我が国の元老、貴族方に申し上げます。

この男は諸兄の信用を裏切り、わずか数滴の涙で

あなた方の街ローマを、そう言わせて頂きます。

あなた方の街をやつの妻と母親に売ったのです。

やつは戦を始める前に誓った決意をまるで、

ぼろきれのように破り捨てました。いっさいの独断で軍議にもかけず、女の涙を見て自らも泣き出しあなた方の勝利を泣き声と共に消し去りました。

これには小姓たちも赤面し勇士たちはあきれて顔を見合わせるばかりです。(5. 6. 93-102)

オーフィディアスは倒したいコリオレーナスが自分の下になり味方になるから手を組んだのであり、ローマを攻めるといふ目的のために味方になった。感情によってローマ攻めをやめてしまったコリオレーナスは再度、オーフィディアスの敵となった。自分の役に立てるからコリオレーナスを召し抱えるのは現実に基づく行為であり、戦争の勝利をないものにしてしまったコリオレーナスを再び敵にしてしまうのもやはり現実に基づいている。

戦争には多大な費用と人員の損失がある。それを考慮に入れたなら勝利を感情によってふいにしてしまうコリオレーナスを非難し、再度敵にするのも納得がいく⁴。オーフィディアスの上の引用は、現実の損失を考えても当然の非難である。現実と照らし合わせて行動し発言するオーフィディアスはコリオレーナスと対極に位置している。

市民の要求は食べる事や平和という実際の側面であり、オーフィディアスの行動はやはり上で説明したように現実に基づく。市民、オーフィディアス共にコリオレーナスを裏切る事になるわけだが、それはコリオレーナスの名誉重視の姿勢とは違い、現実感に基づいている。作品にはコリオレーナスと対極の現実重視の登場人物が存在する。

2. コリオレーナスの言葉への脆弱性

この作品のまず最初の台詞は「行動に出る前に私の話を聞いてくれ」(1. 1. 1-2)、「話せ、話せ」(1. 1. 3)というように話という言葉に強調している。作品で言葉の問題は重要である。キャシー・シュランク(Cathy Shrank)は「『コリオレーナス』と向かい合った時、文芸批評家たちは度々言葉の危機、失敗、反乱、騒動に帰ってきている。特にこの苦しみは作品の主人公に影響しているに見える」(409)と述べているが、この批評を検討してみたい。言葉と主人公コリオレーナスに重要なつながりがあると思われる。

オーフィディアスの軍隊を退け、戦争に打ち勝ったローマはコリオレーナスを称賛し、彼の功績をことさらに強調する。ローマの議事堂内、元老院に呼ばれたコリオレーナスは自らの功績への称賛にどのような反応を示すのだろうか。称賛に対して元老院から立ち去ろうとするコリオレーナスの様子を引用してみる。

元老議員 1	座りなさい、コリオレーナス。 自分の功績を聞かされても恥じる事はないだろう。
コリオレーナス	失礼ながら、私としてはこの傷を受けた話を聞かされるなら、もう一度傷を受ける方がましです。
ブルータス	まさか、私の言葉が元で退席なさるのか。
コリオレーナス	そうではない。もっとも剣にはたじろがぬ俺も 言葉からはよく逃げ出したものだ。お前の言葉は追従ではない。 だから平気だ。俺もお前たち民衆をそれなりに愛しているが。
メニーニウス	まあ、座ってくれ。
コリオレーナス	俺は戦闘合図のラッパを聞きながら日向で、ふけでも取っていたい。 つまらない手柄を大げさにはやし立てられるのを聞くぐらい

称賛に対しては感謝で応えるのが礼儀であり、それが上に立つものとして当然の態度であろう。しかし、コリオレーナスは称賛の言葉にこたえる事が出来ずに逃げ出したい様子を見せる。シュランクの説明する言葉に対しての苦しみは、コリオレーナスにまさに見出す事ができる。

武人としては優れているコリオレーナスは、政治家の要とも言うべき言葉には脆弱性を示している。そもそもマーシャスという名から功績を称えられ、コリオレーナスという称号を与えられた彼には名前の矛盾が存在する事が、アリ・シェーザッド・ザイディ (Ali Shehzad Zaidi) の批評で明らかである。コリオレーナスの称号についてザイディは「時代錯誤がローマの伝統について現れている。征服した都市の名を個人に与える慣例は伝説的コリオレーナスの時代のずっと後に属するものである。コリオレーナスという名はコリオレスの征服をたたえたものである」(3)と歴史的事実を述べているが、主人公コリオレーナスの名前が、実際の慣習とは時代が食い違っているという点で、矛盾に満ちている。名前が時代錯誤であり、不適切を含んでいる。コリオレーナスの言葉に対する弱さと関連させてもいい、与えられた称号ではないだろうか。彼が与えられたコリオレーナスという名前の時代錯誤、および称賛への尻込み、どちらに対しても主人公は言葉への脆弱性を示している。

他人からの誉め言葉に耐えられないという言葉への弱さを示すコリオレーナスであるが、その言葉への弱さとは同時に言葉によって容易に動かされる言葉への免疫のなさを示す。コリオレーナスは母からの言葉には容易に心を動かされる主人公である。執政官になる事に気が進まないコリオレーナスに母がかける言葉は「頼みますよ、かわいい息子。私の誉め言葉で兵士となったとお前は言ったのだから、今度も前と同じように私の誉め言葉で役をしっかりと勤めなさい」(3.2.109-12)というものである。身内からの誉め言葉には動かされるコリオレーナスの姿がわかる母の言葉である。他人からの誉め言葉への反応とは正反対の様子を感じる事ができる。実際にコリオレーナスは「ええ、やらなければなりません」(3.2.113)と母に返事を即座にしている。

執政官の職に対してのコリオレーナスの嫌気と母からの説得による受諾というのは、コリオレーナスの個人の問題と断言していいものであり、国がその事によって大きな損失を受けるというものではない。しかしコリオレーナスはこの母からの言葉への反応を国を動かす重大事となる事に気づかない。母からの言葉への免疫のなさが戦争という一大事を左右してしまう。オーフィディアスの味方になったコリオレーナスに母がローマを攻めない事をお願いした直後のコリオレーナスの様子を引用してみる。

コリオレーナス おお、母上、母上。

何をなさるのです。見てください。天が口を開き、
神々が下界を見て、この自然に反する光景を
笑っておいでです。

おお、母上。あなたはローマに幸運な勝利をもたらした。
だがあなたの息子を、嘘ではなく、おお、嘘では。

命取りとまでは言わないまでも危険なふちに追い込まれた。
このうえはなるようになればいい。
オーフィディアス、約束の戦をすることは出来ないが、
有利な和平を講じよう。なあ、オーフィディアス、
お前が俺であってもこれ以上母の願いを許さず聞き流せるか、
どうだオーフィディアス。(5. 3. 183-94)

一度は怒りによって敵になったローマに母の言葉で簡単に和平を求めるようになってしまうコリオレーナスである。しかもト書きにあるように彼はこれらの言葉を泣きながら発している⁵。戦争によるオーフィディアス方の人員や経済的な損失は、コリオレーナスの感情で無に帰してしまう。母の言葉に対するコリオレーナスの弱さが、戦争の勝利という現実をオーフィディアスから遠ざけてしまった。アン・C・クリステンサン(Ann C. Christensen)は『『コリオレーナス』は守られた空間としての家に関しての考えに疑問を投げかけている。それは親しみと快適さの源なのだが、公と私の互いの領域の緊張をつくりあげ、疑問視しているのだ』(296)と述べているが、戦争とは公であり母への感情とはコリオレーナスの私の領域である。公の利益を私の感情の犠牲にしてしまっている様子がわかる。

コリオレーナスは市民たちからの称賛を受ける事には耐えられず、政治家の要ともいべき言葉への弱さを示した。彼への称賛という現実から遠ざかった。そして戦争の勝利という現実からも母の言葉によって現実から目を背け、現実から離れてしまう登場人物だと言える。

結論

第1節では市民たちの望みは名誉や名声というタイトルではなく、空腹を満たしたいという現実に基づいているし、また戦争の被害から自分たちを救ってくれたゆえにコリオレーナスに名誉の称号を付与するというやはり現実に基づいている事を示した。そしてコリオレーナスを追放すべきでなかったという意見の変化も戦争の被害を受けたくないという現実の願いからである⁶。市民たちは常に現実重視の姿勢である。またオーフィディアスにはコリオレーナスを倒すためには堂々の勝負よりも手段を選ばない現実に基づく姿勢があり、またコリオレーナス追放の真実を見抜く現実感に似たような力が備わっている。一度は味方になったオーフィディアスがコリオレーナスを裏切るのは、コリオレーナスの感情重視の戦争終結よりも戦争の費用と人員の損失という現実重視からである。市民もオーフィディアスも結果的にコリオレーナスを裏切るが常に現実に基づいている。しかし第2節で示したようにコリオレーナスは市民、オーフィディアスの現実重視の考えに合わせられず社交辞令の出来ない言葉の弱さにより、市民から与えられた名誉に答えられなかったり、同じく言葉への免疫のなさという弱さから、母の涙によりローマを攻めないというように言葉に翻弄され、市民、オーフィディアスの求める現実から離れてしまう。

本稿の問はコリオレーナスの悲劇の本質は何か、なぜ殺されなければならなかったのか、

という事であった。ズビ・ジャジェンドーフ(Zvi Jagendorf)は「『コリオレーナス』の二つの焦点を区別したい。一つは市民の面であり、もう一つは英雄の面である」(462)と述べているが、これは上で示した現実重視の市民とオーフィディアスの現実感という面と、名誉の主人公コリオレーナスという二つの面にも当てはまる批評である。市民の面とは現実であり、その意味ではオーフィディアスの現実重視は同じカテゴリーに入れられる。そしてコリオレーナスはその対極にある名誉と感情主軸の英雄のカテゴリーである。コリオレーナスは現実のカテゴリーの対極に位置し、市民にもオーフィディアスにも両方属することが出来ない。なぜコリオレーナスは殺されなければいけなかったのか。それは名誉と感情先行の姿勢によりローマ市民とオーフィディアスの両方の現実から離れ、実際を求める立場の人間に合わせられなかったからである。双方からの敵とは作品冒頭の召使の会話の、戦争の方が平和の時よりも良い、という矛盾の会話、戦争のマイナスと平和のマイナスにも重なるコリオレーナスの状態である。

コリオレーナスの死後は作品最後の台詞「この町には彼のために夫を失い、子を失った者が沢山おり、今も悲しんでいる。だが彼の高潔な生涯は人々の心に長くとどめなければならない」(5. 6. 151-4)という悲しみという感情に関する英雄扱いの死である。しかしこの英雄の死もオーフィディアスの言葉でもわかるように夫や子の沢山の死というマイナスを伴うものである。英雄の死という名声は市民たちの望んだ平和とは反対の結果を生じさせるものだった。この死に方にも市民の望んだ現実とは反対の主人公の様子を見いだせるであろう。コリオレーナスは現実から名誉と感情重視により離れ、ローマからもオーフィディアスからも離れ、属する場所を失ったゆえに悲劇の死を迎えるのである。これが本稿の答である。

高潔さとはしばしば現実とは反対の意味で使われる。しかし、実際の汚れを導き全体を高潔さへと変えていくのが真の英雄である。コリオレーナスは高潔な人物だったかもしれないが、理想の高潔な英雄とは言えない登場人物ではないか。孤独と孤高は違うものであり、孤高は常に大衆の敬意という点で全体とつながっている英雄である。

1. 以下、ウィリアム・シェイクスピア『コリオレーナス』からの引用は、William Shakespeare, *The Tragedy of Coriolanus*, Oxford University Press(2008)の版に拠る。
2. ヴォラムニアはコリオレーナスに第3幕第2場で群衆に甘い顔の一つでも見せれば、好意を手に入れられてローマを破壊から救う事が出来るとし、ローマの公共の利益を述べている。しかし、彼女には同時に息子コリオレーナスを自身の名誉という名のアクセサリーとして扱っている様子が見られ二面性が感じられる。
3. 最終場面でコリオレーナスは法の裁きに従って罰せられるはずが、自らの気性によりオーフィディアスの怒りを買ひ、共謀者に殺される。群衆たちからもすぐに殺してしまえ、などという見下され方をした後に殺される。コリオレーナスのこの名誉の死を強調する発言は、彼の死に方を考えたなら真逆であり、皮肉的である。
4. オーフィディアスのコリオレーナスへの嫉妬と彼を裏切るための口実が完全に一致した結果である。オーフィディアスにも感情の要素はあるが、コリオレーナスの即行動のような単純さはなく、計算高さが感じられる。
5. 涙はしばしば弱さを印象付けるが、コリオレーナスの武人としての強さとは反対の弱い面を示唆するのに効果的である。
6. 移り気の大衆をテーマにした作品にアメリカ短編文学、マーク・トゥエイン(Mark Twain)の「ハドリバーグを腐敗させた男」(“ The Man That Corrupted Hadleyburg ”, 1900)がある。大衆と個人という構成が時代も作者も違うが、似通っていて興味深い。

- Christensen, Ann C. . “ The Return of the Domestic in Coriolanus. ” : *Studies in English Literature, 1500-1900* , Spring, 1997, Vol. 37, No. 2, Tudor and Stuart Drama (Spring, 1997), <https://www.jstor.org/stable/450835>, pp. 295-316.
- Jagendorf, Zvi. “ Body Politic and Private Parts. ” *Shakespeare Quarterly* , Winter, 1990, Vol. 41, No. 4 (Winter, 1990), <https://www.jstor.org/stable/2870776>, pp.455-69.
- Kuzner, James. “ Unbuilding the City: "Coriolanus" and the Birth of Republican Rome. ” *Shakespeare Quarterly* , Summer, 2007, Vol. 58, No. 2 (Summer, 2007), <https://www.jstor.org/stable/4624974>, pp.174-99.
- Langis, Unhae. “ Coriolanus: Inordinate Passions and Powers in Personal and Political Governance. ” *Comparative Drama* , Spring 2010, Vol. 44, No. 1 (Spring 2010), <https://www.jstor.org/stable/23238673>, pp.1-27.
- Miller, Shannon. “ Topicality and Subversion in William Shakespeare's Coriolanus. ” *Studies in English Literature, 1500-1900* , Spring, 1992, Vol. 32, No. 2, Elizabethan and Jacobean Drama (Spring, 1992), <https://www.jstor.org/stable/450737>, pp.287-310.
- Rackin, Phyllis. “ "Coriolanus": Shakespeare's Anatomy of "Virtus". ” : *Modern Language Studies* , Spring, 1983, Vol. 13, No. 2 (Spring, 1983), <https://www.jstor.org/stable/3194489>, pp.68-79.
- Raspa, Richard. “ Place in Shakespeare's Coriolanus: The Intersection of Geography, Culture, and Identity. ” *Mediterranean Studies* , Vol. 26, No. 2, Special Issue: Shakespeare's Mediterranean (2018), <https://www.jstor.org/stable/10.5325/mediterraneanstu.26.2.0213>, pp.213-28.
- Shakespeare, William. *The Tragedy of Coriolanus*, Ed. R. B. Parker , Oxford UV, 2008.
- Shrank, Cathy. “ Civility and the City in "Coriolanus. ” *Shakespeare Quarterly* , Winter, 2003, Vol. 54, No. 4 (Winter, 2003), <https://www.jstor.org/stable/3844056>, pp.406-23.
- Wudel, Darcy. “ Shakespeare's "Coriolanus" in the Political Science Classroom. ” *PS: Political Science and Politics* , Jun., 2002, Vol. 35, No. 2 (Jun., 2002), <https://www.jstor.org/stable/1554722>, pp.217-22.
- Zaidi, Ali Shehzad. “ CORIOLANUS AND THE PARADOX OF ROME IN SHAKESPEARE AND CALDERÓN. ” *Hispanófila* , ENERO 2003, No. 137 (ENERO 2003), <https://www.jstor.org/stable/43894975>, pp.1-17.